

---

# テイルズオブエクシリア～風の少年～

ゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズオブエクシリア〜風の少年〜

### 【Nコード】

N7636Y

### 【作者名】

ゆき

### 【あらすじ】

少年は子供を助けるために死ぬ

そして転生したさきはテイルズオブエクシリアの世界だった

## プロローグ＋一話

side???

どこにでもいる少年がいた

それは普通な人生を送っていた

それはあのおきまでは

その少年の名前は遠野 風斗 歳は17歳

正義感が強く剣術もできる

その日はある雨の日だった

子供が走っていくのをみてほほえましいなそう思っていた

だがその時信号が赤になった

あぶねえそう思った彼は

走っていきその子供を抱きしめそしてはねられた

薄れいく意識その子供は無事だったことを確認した彼は  
息を引き取った

そして彼は起きたら

なんか寝そべりながらせんべいを食っていてゲームをしていた神にあつた

「君か子供を助けたという少年か」

「はいそうですけど」

「まあそんなことで私がどっかに転生させてやるっ」

「転生つてなんであなたができるんですか」

「私が神だからよ」

「神様がそんなせんべいを食いながらゲームをしていいんですか」

「細かいことは気にするなまあ転生させてやるけど能力を上げてあげます

どこがいいかとは聞かないで はい、いつてらっしゃい」

いきなり床が抜けまっさかさまに落ちて行った

「このクソ神がああああああああああ」

まあそんなことがあって今空中から落ちてきているよ

「ぎゃ ああああああああああああああああああああ  
なんか翼みたいなものを創造するそしたら翼が生えた  
おお神の力かな

まあそんな感じでありつつたわけだが  
見渡すと見たことはあるが思いだせないな

「おいお前！ 何をしている？」

「え？」

やっぱりあの世界だな

「怪しい服装だな。何者だ？」

そう兵士が言つと

自分の服装を見ると 変わっていた

少しだけ背も伸びて知らない知識とかもあることを確認した

兵士は剣を抜いて

「抵抗しなければ痛い目に遭わずに済むぞ？」

ここは逃げるか正解だな近くにあったかばんをの中のものを探り

「ここで捕まるわけではないのでね」

そういつてなんか投げつける

それは煙を出し俺の姿を隠す

その間に俺は逃げていた

まあどこに行ったらいいかわからないけど  
海に近い方に走っていく

その時人とぶつかった

「わっ、と……」

「あ、すいません」

ぶつかった人を見るとミラだった近くにはジュードがいた  
俺はミラの顔をよく見る

「どうした？ 私の顔に何か付いてるのか？」

「別に そういうわけではない」

どうするかな一緒にについていって方がいいかな

「ジュード、早く海停に行くぞ？ もたもたしている暇は無いのだから」

「あ、そうだね」

ジュードは頭を少し下げて、女性と一緒に歩いて行ってしまった

後ろから兵士の足音が聞こえる数は結構いるな

俺も急がないとそう思い

ミラとジュードの後を追いかける

追いついたと思ったら

「その3人、止まれ！」

やべえなここで戦闘にならないはずだけど

「ん？ お前は先ほどの……。お前も追われていたのか？」  
「まあそうだな」

「タリム医学校の、ジュード先生？」  
「エデさん!？」

そして、追い掛けてきた兵士の1人とジュードとは顔見知りらしい  
医学校で先生かわかっているけどすごいね

「まさか、先生が要逮捕人だったなんて」

「エデさん、何が起きてるの？」

「ジュード・マティス、逮捕状が出ている。その女と、その怪  
しい男もだ」

俺が怪しいか仕方ないな最初が悪かったとしか言えないな

「軍特法によつて応戦許可も出ている。抵抗はしないでください」  
「そんな……確かに迷惑掛けるような事はしたかもしれないけど、  
重罪だなんて！」

ジュード、私はここで捕まる訳にはいかない。抵抗させてもらおう

女性が剣を抜くと、エデと呼ばれた人が頷いた。

「応戦意思を確認。攻撃する」

兵士が身構え、1人の兵士の杖のような物が赤く光り、炎の球が飛び出した。女性とジュードが避けると、どっかに命中し火を出し燃える

これが魔法かそう思っていると

と、その時、船の方から汽笛が鳴り響いた。

「ジュード、世話になったな」

そう言い残して、女性は船に走って行った。ジュードの方は、女性を見送るだけだ

俺も付いていく前に小声で言う

「いいのか？ あの人行つちまうぜ？」

「僕は……」

「ジュード先生、抵抗すれば罪が重くなるだけですよ？」

そう聞こえたが俺は走って船に乗った

ジュードを助けるかのようにコートを着た背の高い男性が兵士を殴り飛ばしていった。

なにをいったかわからないけどジュードとその男は走ってきて

その男はジュードを抱えて、高く積まれた積み荷を足場に、船に向かって飛翔した。

「だぶっ！？ じっ……ばっ！？」

「いつてて……」

船に着地した瞬間投げ出されて、二人は転がって壁に激突してしまった

「お、おい……あんだ達……」

「いやあ、軍が重罪人を追ってるらしくてさ。でも、こんなイイ男と女、子供が重罪人に見える？」

不審がっていた船員達に、男性がそう言ってごまかしていた

「アルヴィンだ。君はジュードって言ったな？」

「あ、うん。こっちはミラ」

「で、おたくは？」

名前か風だから

「俺はウィンドだ」

「おいあんだ達、ちょっといいか？」

やっと聞けると思ったのに、今度は船員に話し掛けられてしまった。

「途中で乗船してきたんだ。身元の確認をさせてくれ」

## プロローグ＋一話（後書き）

まあよろしくです

## 第二話

船長に拘束されてから数十分後。やっと解放されて甲板に出る事が出来た。

「船長の奴、勘弁しろよな。いつまで尋問するつもりだったんだよ」

「致し方あるまい。身分を示すのもないのだからな」

「そりやおたくがだろ。」

そう話しているのも聞いていた

俺の身分がわかったぞかばんに入っていた  
名前も同じであれだわ冒険家らしい

「ア・ジュールなんて、外国だよ……」

甲板に戻ると、一番最初に解放されたジュードが黄昏ていた。

「それにしても、医学生だったとはね」

アルヴィンがそう言いながら空を仰いだ。

「ほら、イル・ファンの夜域が終わるぜ？」

刹那、空が夜から昼間の青色に変わった。

「どうして助けてくれたの？普通はあんな所で助けられないよな」

「金になりそうだからだから」

「何故私達を助ける事が金になる？」

「比較的ヤバい感じの奴らつてのは、大抵金を持つてるからな」

「僕……そんなにお金持つてないよ？」

「生憎、私もだ」

「俺も少しだけなら」

「まじか……。それじゃあ値打ちものでも受け付けるぜ。」

「無いよ……あんな状況だったし」

「高く売れそうなものはないだろうな」

「俺もあるにはあるが大切なものだ」

「アルヴィンつて、何の仕事してるの？ 軍人みただけど、何か違う気がするし」

「へえ、いい線いつてる。傭兵だ 金は頂くが人助けをするすばらしい仕事」

「へえそうなんだ」

「ふむ、それは感心なことだ」

「はあ、しゃあねえな ア・ジュールで仕事でも探すか」

「すまなかつたな」

「ボランティアか早くア・ジュールに着かないかね」

俺なんか空気になってない

まあしばらくたち  
夕方ぐらいについた

ジュードはアルヴィンに

「外国つて言っても、あんまり変わらないんだね」

「ア・ジュールつてもここらへんはな」

「そうなんだ。あ、地図がある。見てくるね」

アルヴィンは俺とミラのとくに近づいて

「空元気かねえ」

「頑張っているんだろう」

「気持ちを切り替えたのだ。見た目ほど幼くはないのだな」

「おたくが巻き込んだんじゃないか？ずいぶん他人事だな」

「たしかに世話になったがあれは本人の意思だぞ？私は再三帰れと言ったのに」

「それでおたくに当たるわけにはいけない。だから空元気が……」

「どっちにしてもオトナなこと」

「そうか本当は無理しているような子供に見えるがな」

「それもそうか……」

そう話した後ミラのところにあるいていく

「ここから北か」

「ふん、それで？今から発つのか？」

「いや アルヴィン、傭兵と言う事は闘いには自信があるんだな」  
「ああ、そりゃあな」  
「私に剣の使い方を教えてくれ 今の私は四大の力を使えないこの先の道は困難だ」

「剣ねえ……むしろオレを雇ってほしいぐらいなんだが」  
「金は無いぞ？」  
「なら、稼ぎながら教えるってのはどうだ？」  
「どういふこと」

説明でもしてやるか

「そうだな困ってる人を助けて金を稼ぎつつ、かつ剣の稽古をするとういうことをアルヴィンは言いたいんじゃないのか」

「よくわかってるじゃねえか」

「わかったかジュード」

ジュードはうなずいた

そして依頼をする人を探しに行く

「海停の近くに魔物が住みついてしまって、危険が広まる前に退治してもらえませんか？」

イラスト間道・西方の南西にいる魔物退治だった

くチャット

「そういえばおたくどうしてついてくるんだ」

「そういえばそうだねミラが払ってくれるからついてこないでいいの」

「まああれだ面白そうだからだな」笑いながら言う

「そんなものか」

「そういつものだ」

イラスト海停から少し歩くと数体の魔物達が出た。

いざ、戦闘をしようとする...

「なんで、リアルオーブが光った？」

俺と同じように、ジュード、ミラ、アルヴィンの持っていた石  
リアルオーブが光っていた。

「みんなリアルオーブ持ってたのか」

「それなら、共鳴<sup>リンク</sup>戦闘<sup>リンク</sup>いってみるか！」  
「共鳴？」

そうジュードはアルヴィンに聞いた

「リアルオーブには仲間の意識を共有する力がある。それを利用すれば共鳴術技リンクアーツが発動するって訳だ」

「具体的にどうすれば？」

「ま、百聞は一見に如かずってな。リアルオーブに意識を集中しろ！」

アルヴィンの掛け声で全員がリアルオーブに集中すると、さらに光が増した。

それが合図となり、戦闘が始まった。

陣形は俺とミラ アルヴィンが特攻を仕掛けジュードはサポートをする

「そろそろ、共鳴アーツリンクいけるんじゃないね？」

ジュードが魔神拳、ミラがウインドランス 術名はさつき教えてもらった を放ち、タイミングが合った所で、共鳴術技リンクアーツが発動する！

「切り裂け真空！ 絶風刃！！」

「俺たちも行くぞ」

「おっしやー」

「くえ旋風！魔神旋風斬！！」

「友情・協力・勝利！人間らしい戦法だろ？」

「うむ、気に入った」

「初めて使ったけどいいものだな」

「うん、1人じゃないって嬉しいね」

「ああ、いいこと言うねジュード君」

ふう初めての戦闘だけどなんかいい感じだな

「そーいや、こちら辺になんとかいう村があったな。行ってみる」

「頼まれた仕事、まだ終わってないよ？」

「優等生々、そんなんじゃ肩凝るぜ？」

「ああいう依頼ってのは自分に合ったペースでこなしていけばいいんだぜジュード」

ジュードに言う俺とアルヴィンにミラは聞く

「そういうものか？」

「「そういうものだよ」「」

「そもそも、依頼を受けたのは、俺に払う報酬を稼ぐ目的だろ」「他に金を稼ぐあてがあるならそっちを優先してかまわないぜ」

「ニ・アケニアまで行けば報酬は払えると思うが」

「そうか。ま、雇い主はそっちだ。行くも戻るもおたくら次第好きにすればいいさ」

イラート間道の西の方を散策していると、ジュードがそんな事を言った。

「確かに、ここいらでは見ない魔物のようだな」

「じゃあいつちよやりますか」

「ああ、サクツと行こうぜ」

みんなが武器を出した瞬間、魔物が襲いかかってきた。

「斬絶剣」

ガードが堅いそう思ったら

「ガードはオレが崩すぜ！」

銃を打ちガードを崩す

「ナイスアルヴィン」

「鳳凰烈破」

うん新技できた

「行くぞミラ！」

「ああ、準備はできている！」

「吹き荒れる！！塵風烈破！！」

続けて

「合わせるよジュード」

「うんわかった」

「くられえ！！魔神連牙斬」

その攻撃が当たり魔物は消えた

ミラ「紙一重だったな」

俺「そうか俺には楽だったけど」

アル「お前どんだけ体力あるんだよ」

「大丈夫かミラ？」

「ああ。やはり実践が一番の訓練だな」

「んじゃ、イラスト海停にもどって報告しよつぜ」

「うん。早く魔物を退治したことを教えないとね」

イラート海停に戻ってきた俺達は早速、依頼達成のことを依頼主に報告すると、

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「とまあこんな具合にやるんだ」

「困っている奴はどこにでもいるもんだから 結構稼げるぜ」

「さすがアルヴィン。慣れてるね」

## 第二話（後書き）

次回 初めての空腹です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7636y/>

---

テイルズオブエクシリア～風の少年～

2011年11月23日17時51分発行